

豪雨被害を見て考える

まず始めに令和2年7月豪雨で被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

私は今回の豪雨災害をみて、少子高齢化が続く人口減少時代に災害を最小限に抑えるには鳥の目で見た総合的な取り組みが重要だと実感しました。

地球温暖化で日本列島周辺の海水温が上昇し梅雨の雨がスコールのような激しいものになり、毎年多くの豪雨災害を引き起こしています。気象庁のホームページにある「全国の1時間降水量50mm以上の年間発生回数」を見ると2010年から2019年の10年間で327回発生し、観測を開始した1976年から1985年までの10年間の226回の1.4倍にまで増えています。また、湿舌や線状降水帯の発生で総雨量も増えています。

都市部では高度成長期以降、郊外の山を切り開いたり、低湿地を埋めたりして市街地を無秩序に拡大させたことも被害を大きくしています。また中山間地域では耕作放棄地が増え、溜池などの管理も不十分になっています。加えて水源地域の森林伐採で山の保水力が下がるとともに、流出した土砂が溜まってダムの洪水調整能力も低下しています。これまで河川堤防などは30年、50年確率といった、何年に一度の確率で洪水が起こるかを想定して時間当たりの降雨強度を求めて設計してきました。このため、新たな堤防は規模の大きなものになり多額の予算と時間を要します。

そこで、部門ごとに個別計画を立てて課題解決するのではなく、関係する部門が全体最適を意識して総力をあげて課題解決に取り組むことの重要性を再認識しました。例えば空き家対策として緑被率を増やしたり、危険区域の住民に移転してもらったり、農林業の災害防除能力を活用したりするなどあらゆる手段を駆使して対策を立てるのです。また停電対策や機動的なポンプ車の配置などのソフト施策も重要になります。幸い衛星による気象観測技術の向上やスーパーコンピュータ富岳などの登場でシミュレーション精度は格段に向上しています。これからはデータ活用能力を持った複眼思考人材が活躍する時代なのです。

社会の変化が加速する

暑中お見舞い申し上げます。異常気象ともいえる豪雨を伴った長い梅雨が明けるといきなり猛暑が続くとともにWithコロナのマスク着用もあり熱中症が心配です。水分を十分に取って、換気をしながらクーラーを使うなど熱中症対策には十分留意してください。そのような中、コロナ禍で倒産した企業や職を失った人の報道が続きウィルスという見えない敵に将来への不安が広がっています。

一方、新型コロナの登場によって、高速インターネットやクラウドサービス、人工知能(AI)などのIT(情報技術)によってビジネスや生活の質を高めるDX(デジタルトランスフォーメーション)という時計の針が早く進み始めたことも事実です。セシルマクビーはリアルな店舗事業から撤退を決めこれからはオンラインショッピングに軸足を移すと発表しましたし、ユニクロの柳井社長は「これからはe-ビジネスと近場のビジネスの時代」と発言しています。

21世紀に入って資源やエネルギーに加え地球環境の限界が目に見えるようになり、昨今は世界を上げてSDGsの取り組みが喧伝されています。消費の主体もモノからコトへ徐々に変化していましたが、今回の新型コロナウイルスの登場によってデザインを変えるなど情報化することで消費を拡大してきた20世紀型のビジネスモデルの残像さえ消えつつある印象です。

目に見えない理不尽な新型コロナウイルスがもたらしている「不安」を取り除くには、自分の立ち位置を俯瞰しポストコロナの世界を見据えて準備を進めるしかありません。長く続く巣籠り期間を逆手にとって、成長思考から解放された、希望が持てるポストコロナ社会の生き方をシミュレーションしてみませんか。見田宗介著「現代社会の理論」の中にある「情報化/消費社会の転回」という問いやそれに答えた「現代社会はどこに向かうか」(共に岩波新書)の中に現在の立ち位置や社会変革の方向を考えるヒントが見出だせると思います。